

# 東彼杵 ダラフ

9 / 23 郷 彼杵宿郷

江戸時代、オランダ商館長や幕府の役人などが歩き  
多くの人とモノ、情報と文化が交差した長崎街道。  
港の機能があった彼杵宿は格別の賑わいだったという。  
宿場町の面影を探して歩いた。

制作 地域おこし協力隊  
文 飯塚将次  
写真 堀越一孝  
編集・デザイン 小玉大介







↑ 彼杵宿の子どもたちは向こう岸まで泳ぎきることが大人への試練だった

役場のすぐそばに商店街がある。ここが江戸時代、長崎街道沿いの宿場町として大いに栄えた彼杵宿。協力隊3人ともこの付近に住んでいるが、往時を偲んで歩く道というよりは、役場まで通勤で急ぐ道という感じになっていた。

“東彼杵グラフ”は郷ごとにまとめているので線を引くと、親和銀行まで蔵本郷だった。反対側は紙谷製茶からが彼杵宿郷。近くに住んでいながらわからないことばかり。長崎街道や彼杵宿などの歴史について詳しい佐藤隆善さんを訪ねた。「賑わっていた頃のものはもう何もなぞ」と佐藤さん。いきなりの先制パンチでグラついたが、運よくガイドをしていただけることになり、彼杵宿の面影探しが始まった。

かつて多くの人とモノが行き交っていた長崎街道の彼杵宿。彼杵港があり海運の機能が備わっていたことから、その賑わいは格別なものだったようだ。「最盛期の1800年代には本町180m、平戸街道沿いの金谷150mに、300軒近い商家が軒を連ねていた」と佐藤さん。

それにしても、彼杵宿に関するものは本当に何もない。佐藤さんの話でイメージしながら歩く。諸大名や幕府の役人が宿泊するために置かれた本陣は彼杵神社になっていた。本陣の補助的な機能を持つ脇本陣は葉っぱの壁しか残っていない…。と思いきや、裏に回ると古そうな石の台があった。「ここに穴が開いとるっちゃんね。旗指物の台だろうと思われる。役人が来ているということ町民に知らせるためのものじゃなかるうか」と佐藤さんは言う。その隣には井戸の跡もあり、「海の近くだが井戸の水に潮が入ることはなかった。本陣や脇本陣が置かれたこの通りは特別。選ばれた人が宿や店を構えていた。それだけきちんと管理されていた」と教えてくれる。

長崎街道と平戸街道起点が交わる所の新しい石橋が、ここに思案橋があったことを知らせている。よく見ると、彼杵神社の小さな橋から彼杵港までコンクリートの色が違う。思案橋は想像以上に小さいものだとわかった。白井川にコンクリートの蓋をしているだけというので、「車の行き来は大変だけど、こ



↑ いつも素通りしていた脇本陣跡。緑カーテンの向こうに史跡があった



↑ 彼杵宿のメインストリート。右側のコンクリートの所に川が流れていた





↑ 現在の高速インター付近から見た風景（昭和51年頃）エミフクと書いてある屋根が見える

れを外せば街並みが変わるね」と堀越隊員とひそひそ話で盛り上がる。

「唯一、変わっていない所はここかな」と石垣で築かれた彼杵港を案内してくれる。元禄年間に築港された後、何度か増築をしているが、時津渡しの元禄波止場などほぼ当時のまま残っている。八坂神社のたたずまいも、シーボルトが江戸参府の際に専属絵師の川原慶賀に描かせた風景のままだった。

彼杵港では町の名物である鯨肉の陸揚げも行われ、江戸時代初期から明治にかけて西海捕鯨の中継地として栄えたそうだ。また鯨肉取引の中心地として、この場所から海運や長崎街道、平戸街道を通じて九州各地に送られていった。町とクジラの関係は300年以上も前から始まっていたというから驚き。無くなり、変わりゆくものが多い中で、今も息づくクジラ文化。大切に残して欲しいと思った。

「あんたんとこの金谷は彼杵港を作った時にできた地区」と佐藤さんに教えてもらう。もともと今の道の駅の裏にあった金谷地区は、白井川河口を掘って

港を整備した時に移転したそうだ。「引っ越したり、新しく家を建てたりして経済的に大変だったでしょう。負担を軽減するために、大村藩から特別に市を開くことを許可された。毎月6の付く日に市が立つことから六斎市と呼ばれた」

藩内の産物が集まる港の市には、1700年代後半になるとお茶も売買されるようになったと言う。「1700年代は天地・天候異変があって、社会的不安や経済的に落ち込み、各藩の財政が疲弊していた。そこで、全国的に新しい産業をおこしましょうとなった。上彼杵村では藩が奨励したお茶の植栽を本格的に行い、生産が飛躍的に増えた。新茶が出回る頃の六斎市には当然お茶が並ぶ。これを茶市と称したと考えられる」と佐藤さん。

六斎市をルーツに、現在のそのぎ茶市は昭和44年に各商店によって発足された彼杵茶市振興会が宣伝などにも努め、多くの人が新茶を楽しむ市として定着した。紙谷製茶園の紙谷正明さんに話を聞くと、「当時の商工会青年部などが、地元の人間でなんかせん



↑ 六斎市で賑わったとされる金谷地区の通り



↑ 10代目の紙谷正明さんに話を聞く





↑ 話し上手な藤田酒店の藤田安幸さん。「東彼杵のスターは後にも先にも金谷地区出身の元プロ野球選手、香田勲男さんだよ！（笑）」



↑ 一升瓶の陳列棚から「恵美福」の徳利が出てきた

ば！とイベントなども行って盛り上げていった」と話す。

商店街の裏の広大な空き地は杵の川酒造の前身、旧太陽酒造の跡地。地元では“エミフク”の名で親しまれている。天保10年に丁子屋として創業し、銘酒「強国一」は時代とともに順調に業績を伸ばした。昭和7年に名誉町民第一号の森英示氏により丁子屋醸造株式会社になると、安くておいしい酒づくりを熱心に研究し、合成酒「初日」や焼酎などあらゆる酒類を手がけ、全国で一流の酒造会社に育てあげたという。その後、数社と合併して諫早市へすべて移転した。

佐藤さんは「今はもうなんもなかばってん。昭和20～30年代は醸造税だけで町が成り立っていたというほど別格だった」と話す。当時の建物などはやっぱり残っていなかった。土台の一部が残っていたり、若松屋の新館が旧太陽酒造の倉庫の形を残して改築したという発見はあったが。

藤田酒店の2階に、お多福マークの樽を見つけた。中に入って藤田安幸さんに話を聞くと、「親父が旧太陽酒造に勤めていたし、工場がすぐ裏だったから覚えてますよ。銘柄は“強国一”から、戦後に“恵美福”に変わりました。これには、戦後復興と平和で笑顔の国づくりの願いが込められていたようです」

“エミフク”と書かれたレンガの煙突は町のシンボルだった。「近所のお母さんたちが瓶詰めなどで働いていて、定時になるとバアーっと出てきて、商店で買い物している姿を今も思い出しますよ。それがぼんやりなくなっちゃたからね」と懐かしそうに当時を振り返った。煙突はとにかく高かった。「この辺の人はさあ、釣りが好きだから、沖に出た時には釣りのポイントの目印にしていた人が多かった（笑）」

彼杵宿は実体がなく写真に撮れないものが多かっただけに、いろいろな人と話をするいい機会だった。

“エミフク”では酒造りのにおい、煙突から出るもくもくの煙、瓶が擦れる音、配送するトラックの揺れなど、空き地を見ただけでは感じるできない話を聞くことができた。

端から何もないと決めつけていた。近所ももっとじっくりと歩かねば。

※ 彼杵宿郷へは、町営バス「町営バスセンター」「江頭」「彼杵名切」「一本松」JR九州バス「彼杵郵便局前」「江頭」のいずれかのバス停を利用。

今回は蔵本郷。お楽しみに！

